

2026 年 9 月 1 日

2026 年度 東北福祉大学卒業生アンケート調査の結果

東北福祉大学キャリアセンター

1. はじめに

東北福祉大学キャリアセンターでは、東北福祉大学（以下、「本学」と表記する）の教育が就職先での仕事においてどの程度役立ったかを評価するため、2026 年 6 月 1 日から 6 月 30 日にかけて、卒業生に対してアンケート調査を実施した。宮城県、山形県の 2 事業所の協力を得て、68 名に対し調査票を配布し 48 名から回収することができた。回収率は 70.6%である。なお、回答者の現勤務先での在職年数は、3 年未満:が 8 名（16.7%）、3～5 年未満が 5 名（10.4%）、5～10 年未満が 9 名（18.8%）、10～20 年未満:が 17 名（35.4%）、20 年以上が 9 名（18.8%）であり、在職 10 年以上の回答者が半数以上（54.2%）を占めている。

以下の項目ごとに集計結果をまとめた。

2. 調査結果

2.1 それぞれの能力について社会人になってから役に立ったと感じますか。

2.1.1 東北福祉大学の専門分野の知識・技法・技術

項目	割合
とても役に立った	20.8%
役に立った	62.5%
あまり役に立たなかった	14.6%
全く役に立たなかった	2.1%

大学で修得した専門分野の知識や技法、技術に関しては、全体の 83.3%にあたる回答者が「とても役に立った」または「役に立った」と肯定的に評価している。大部分の回答者が「役に立った」を選択しており、大学で培った専門的な基礎知識が、卒業後の実務において確かな土台として機能していることがうかがえる。

2.1.2 周囲と円滑にコミュニケーションする力

項目	割合
とても役に立った	27.1%
役に立った	66.7%
あまり役に立たなかった	4.2%
全く役に立たなかった	2.1%

周囲と円滑にコミュニケーションする力については、肯定的な評価が 93.8%に達しており、全項目の中でも特に高い評価を獲得している。「とても役に立った」とする割合も約 3 割にのぼり、業種や職種を問わず、社会人として日々の対人関係や業務をスムーズに進める上で最も欠かせない基礎能力として強く実感されている。

2.1.3 幅広い知識や教養

項目	割合
とても役に立った	18.8%
役に立った	72.9%
あまり役に立たなかった	6.2%
全く役に立たなかった	2.1%

幅広い知識や教養に関する項目でも、肯定率が 91.7%と非常に高い水準を示している。「役に立った」との回答が 7 割以上を占めており、専門性に限定されない教養や多角的な視野が、社会の多様な場面で汎用的に役立っている実態が読み取れる。

2.1.4 論理的に思考する力

項目	割合
とても役に立った	20.8%
役に立った	64.4%
あまり役に立たなかった	12.5%
全く役に立たなかった	2.1%

論理的に思考する力については、85.4%の回答者が有効性を認めている。レポート作成や講義等で日常的に培われた論理的な思考習慣が、業務上の課題整理や判断、合意形成の場で実効性を発揮していると考えられる。

2.1.5 プレゼンテーション力

項目	割合
とても役に立った	29.2%
役に立った	41.7%
あまり役に立たなかった	27.1%
全く役に立たなかった	2.1%

プレゼンテーション力に関しては、肯定評価が 70.8%にとどまり、全項目の中で最も低い結果となった。一方で「とても役に立った」と回答した割合が 29.2%と高い反面、「あ

まり役に立たなかった」という回答も 27.1%存在しており、職種や業務内容によってプレゼンテーション機会の有無や必要性に差が生じていることが要因と推測される。

2.1.6 主体的に行動する力

項目	割合
とても役に立った	22.9%
役に立った	64.6%
あまり役に立たなかった	10.4%
全く役に立たなかった	2.1%

主体的に行動する力については、87.5%の回答者が「役に立った」以上と評価している。指示を待つだけでなく自ら考え能動的に動く姿勢は、社会人としての自立や現場での業務遂行において強く支持されている。

2.1.7 新たな課題を発見する力

項目	割合
とても役に立った	20.8%
役に立った	56.2%
あまり役に立たなかった	20.8%
全く役に立たなかった	2.1%

新たな課題を発見する力については、肯定評価が 77.1%となったものの、「あまり役に立たなかった」とする回答が 20.8%と 2 割を超えた。与えられた課題に対応するだけでなく、自ら潜在的な問題を見つけ出す応用力へ繋げることに難しさを感じる場面もあることが示唆されている。

2.1.8 課題の解決に努める力

項目	割合
とても役に立った	22.9%
役に立った	62.5%
あまり役に立たなかった	12.5%
全く役に立たなかった	2.1%

課題の解決に努める力については、85.4%の回答者が「とても役に立った」または「役に立った」と肯定的に評価している。直面した問題に対して逃げずに取り組む姿勢や実践的なアプローチが、社会人としての業務遂行やトラブル対応において確かな成果に繋がっ

ていることがうかがえる。

2.1.9 周囲と協力して物事を進める力

項目	割合
とても役に立った	35.4%
役に立った	58.3%
あまり役に立たなかった	4.2%
全く役に立たなかった	2.1%

周囲と協力して物事を進める力に関しては、肯定的な評価が 93.8%に達しており、極めて高い有効性が示されている。「とても役に立った」の割合も 35.4%と高く、組織やチームの一員として他者と連携し、目標を達成する協調性が実務の現場で強く求められ、重宝されている実態が読み取れる。

2.1.10 多様性に関する知識・多様な考えを受け入れる力

項目	割合
とても役に立った	35.4%
役に立った	60.4%
あまり役に立たなかった	2.1%
全く役に立たなかった	2.1%

多様性に関する知識・多様な考えを受け入れる力については、肯定率が 95.8%となり、全体の 13 項目の中でも最高水準の評価を獲得している。背景や価値観の異なる人々と関わる現代社会において、多様性を尊重し受け入れる姿勢が、あらゆる場面で極めて強力な武器になっていると分析できる。

2.1.11 社会の中で自立する力

項目	割合
とても役に立った	22.9%
役に立った	70.8%
あまり役に立たなかった	4.2%
全く役に立たなかった	2.1%

社会の中で自立する力では、93.8%の回答者が有効性を認めている。「役に立った」との回答が 7 割を超えており、大学生活を通じて培われた社会人としての自立心や自己管理能力が、卒業後の安定した社会生活やキャリア形成を支えている。

2.1.12 強い信念を持って自らの人生を切り拓いていく力

項目	割合
とても役に立った	16.7%
役に立った	58.3%
あまり役に立たなかった	22.9%
全く役に立たなかった	2.1%

強い信念を持って自らの人生を切り拓いていく力に関しては、肯定評価が75.0%にとどまった。「あまり役に立たなかった」という回答も22.9%存在しており、組織の方針やチームワークを重視する実務環境においては、個人の強い信念を前面に出す機会が相対的に少ない可能性が推測される。

2.1.13 継続して学び続ける力

項目	割合
とても役に立った	25.0%
役に立った	58.3%
あまり役に立たなかった	14.6%
全く役に立たなかった	2.1%

継続して学び続ける力については、83.3%の回答者が「役に立った」以上と評価している。環境の変化が激しい現代において、大学卒業後も自己研鑽を続け知識やスキルを更新していく姿勢が、長期的なキャリア維持や業務能力の向上に寄与していることが示されている。

2.2 あなたが学生時代に取り組んでおいてよかったと思うことを選択してください。

(複数回答可)

項目	割合
学業	64.6%
アルバイト	64.6%
部活動・サークル活動	54.2%
ボランティア活動	31.2%
趣味の活動	31.4%
インターンシップ	12.5%
留学	4.2%
その他	16.7%
特にない	2.1%

最も高い割合を示したのは「学業」と「アルバイト」の2項目（ともに64.6%）である。大学での専門知識の修得という本業の成果に加え、社会との接点や対人スキル、自立心を養うアルバイトの経験が、卒業後の実務に直結していることがうかがえる。次いで「部活動・サークル活動」（54.2%）が過半数を占めており、集団生活の中で培われた協調性や人間関係の構築力も社会人としての大きな土台となっている。

一方、「趣味の活動」（31.4%）や「ボランティア活動」（31.2%）は約3割となっており、生活の豊かさや視野の広がりを与える要素として一定の評価を得ている。一方、「インターンシップ」（12.5%）や「留学」（4.2%）は少数にとどまるが、これは有効性の有無というよりも実際の経験者数の少なさが影響していると考えられる。

「特にない」という回答が2.1%とごくわずかであることから、ほぼすべての卒業生が学生時代の何らかの経験に意義を見出している。専門性を培う学業と、社会性を育む実践的な活動のバランスよい取り組みが、卒業後の高い納得感に繋がっていると言える。

2.3 あなたが学生時代にもっと取り組めばよかったと思うことを選択してください。

（複数回答可）

項目	割合
学業	47.9%
ボランティア活動	33.3%
部活動・サークル活動	31.2%
留学	20.8%
趣味の活動	20.8%
インターンシップ	18.8%
アルバイト	12.5%
その他	6.2%
特にない	10.4%

最も高い割合を示したのは「学業」（47.9%）であり、約半数の卒業生が学生時代の学習内容や学びの深さに対して悔いを残していることがうかがえる。社会に出てから知識の不足や学び直しの必要性を実感する場面が多いことが背景にあると考えられる。次いで「ボランティア活動」（33.3%）と「部活動・サークル活動」（31.2%）が約3割で続いている。多様な人々との関わりや人間関係の形成、課外での実践経験をより多く積んでおけばよかったと感じる層が一定数存在している。

また、「留学」（20.8%）や「趣味の活動」（20.8%）、「インターンシップ」（18.8%）が約2割を占めている。特に留学やインターンシップは、「取り組んでよかったこと」としての回答者は少数だったものの、「もっと取り組めばよかったこと」では上位に位置しており、在学中に挑戦しなかったことに対する後悔や潜在的なニーズの高さが顕著に表れている。

一方で、「アルバイト」は12.5%にとどまり、「特にない」という回答も10.4%存在する。

卒業生は社会人になってから必要性を痛感する知識の補強（学業）や、在学中にしかできない挑戦的な活動（ボランティア、留学、インターンシップ）に対して、「もっと時間を投資すべきだった」と振り返る傾向が強く読み取れる。

3. 結論

本調査の結果、卒業生は「多様性の受容」、「コミュニケーション」、「協調性」、「自立性」といった対人・汎用スキルを社会人として最も役立つ能力（肯定率9割超）として実感している。学生時代には「学業」と「アルバイト」のそれぞれに対する取り組みへの評価がともに高く（各64.6%）、一方で、卒業後は「学業での深い学び（47.9%）」や「留学・インターンシップ・ボランティア等の実践的挑戦」に対する後悔や再学習ニーズが顕著に現れる。

したがって、大学教育・支援における今後の重要課題は、強みである高レベルな社会性・協調性の育成を維持しつつ、学業のさらなる深化と低学年からの課外実践（留学・インターンシップ等）への挑戦機会の拡充を図ることである。